

## 実践事例 3

新教育課程の編成と並行し、自校が育成を目指す資質・能力を明確化・具体化してマスタールーブリックを作成した広島県立神辺旭高校。そのマスタールーブリックを基に、各教科・科目においてルーブリックを作成し、ICTの活用と積極的な互見授業を通して、資質・能力の育成を全校体制で実現することを目指している。

# 資質・能力の育成を目指し、 ルーブリックに基づいた

# 指導と評価の改善を

# ICT活用と互見授業で推進

## 広島県立神辺旭高校

かななべあさひ

### 学校概要

設立 1980（昭和55）年  
形態 全日制／普通科・体育科／共学  
生徒数 1学年240人  
2021年度入試合格実績（現浪計） 国公立  
大は、京都大、島根大、岡山大、広島大、山口大、  
香川大などに37人が合格。私立大は、同志社大、  
関西大、関西学院大などに延べ202人が合格。

多様な資質・能力の育成を図る  
ため、総単位数を31単位に

普通科と体育科を有し、部活動も盛んな広島県立神辺旭高校は、「文武一道」の伝統を守るため、生徒の主体的な活動の尊重と進路目標の実現の両立を図ることに重点を置いて、新教育課程を編成した。2022年度入学者の1〜3年次の総単位数はそれぞれ31単位

（図1）。20年度以前は33単位、21年度は32単位と、段階的に放課後の時間を増やしてきた。教務主任の梅村嘉雄先生は、次のように説明する。

「希望進路を実現する上で必要な学力を育みつつ、多様な資質・能力を育成するため、生徒が教科以外のことにも目を向けて思考したり、自分自身とじっくり向き合ったり、部活動に打ち込んだりする時間を十分に確保したいと考えました。さらに、教師の働き方改革も念頭に置いています」

時に自校の伝統や特色に立ち返りながら、教科・科目を超えて全教師が根気強く話し合い、新教育課程の編成を行った。

「例えば、普通科の1年次の体育は2単位とする案も出ました。しかし、1年次に体育教育に力を



主幹教諭  
徳本孝治  
とくもと・こうじ  
教職歴31年。同校に赴任して2年目。国語科。  
教務主任  
梅村嘉雄  
うめむら・よしお  
教職歴34年。同校に赴任して2年目。理科。  
カリマネプロジェクト会議委員  
藤田香織  
ふじた・かおり  
教職歴22年。同校に赴任して14年目。国語科。  
カリマネプロジェクト会議委員、探究学習責任者  
前田智子  
まえだ・ともこ  
教職歴3年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。  
教育情報部主任  
西村由  
にしむら・ゆう  
カリマネプロジェクト会議推進リーダー、教育情報部  
上村純  
うえむら・じゅん  
教職歴7年。同校に赴任して3年目。英語科。



※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

図1 広島県立神辺旭高校 2022年度入学者 教育課程

	第1学年		第2学年			第3学年		
	普通科	体育科	普通科		体育科	普通科		体育科
			I類 (理型)	II類 (文型)		I類 (理型)	II類 (文型)	
1	現代の国語	現代の国語	論理国語	論理国語	論理国語	論理国語	論理国語	論理国語
2								
3	言語文化	言語文化	古典探究	古典探究	古典探究	古典探究	古典探究	古典探究
4								
5	歴史総合	歴史総合	地理総合	文学国語	地理総合	地理探究	文学国語	基礎演習 基礎演習
6								
7	数学I	数学I	公共	家庭基礎	世界史探究 日本史探究	数学III 発展数学	世界史探究 日本史探究	世界史探究 日本史探究 地理探究
8								
9	数学A	数学A	数学II	公共	数学II	数学B	政治・経済	生物基礎
10								
11	数学II	保健	数学B			数学C		
12								
13	物理基礎	芸術I	数学C	数学II	公共	応用数学	数学B	数学演習 (数学B)
14							数学C	
15	生物基礎	英語 コミュニケーション I	化学基礎	数学B	科学と 人間生活	物理 生物	総合数学	数学演習 (数学B)
16			化学	数学C	保健			
17			物理生物	化学基礎				
18	体育	論理・ 表現I	体育	体育	英語 コミュニケーション II	化学	基礎演習 基礎演習	基礎演習 基礎演習
19								
20	保健	情報I	保健	保健	英語 コミュニケーション II	化学	基礎演習 基礎演習	基礎演習 基礎演習
21								
22	芸術I	スポーツ 概論	英語 コミュニケーション II	英語 コミュニケーション II	英語 コミュニケーション II	体育	体育	スポーツI
23		スポーツI						
24	英語 コミュニケーション I	スポーツII	英語 コミュニケーション II	英語 コミュニケーション II	英語 コミュニケーション II	英語 コミュニケーション III	英語 コミュニケーション III	スポーツIII /スポーツ IV
25		スポーツV						
26	論理・ 表現I	スポーツVI	論理・ 表現II	論理・ 表現II	論理・ 表現II	論理・ 表現III	論理・ 表現III	スポーツVI
27		スポーツ 総合演習						
28	家庭基礎	専攻 スポーツ	情報I	情報I	専攻 スポーツ	論理・ 表現III	論理・ 表現III	専攻 スポーツ
29								
30	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間	総合的な 探究の 時間
31	LHR	LHR	LHR	LHR	LHR	LHR	LHR	LHR

※学校資料を基に編集部で作成。

教育活動の評価のよりどころとなるルーブリックを作成

新教育課程の編成と並行して、

本校が育成を目指す資質・能力の明確化にも取り組んだ。同校では、教育活動全体を通して育成を目指す5つの資質・能力を設定（P.18図2）。それに基づき、それぞれの資質・能力の到達レベルを4段階で示すマスタールーブリックを作成した。カリマネプロジェクト会議推進リーダーの上村純先生

は、マスタールーブリック作成のねらいを次のように述べる。「観点別学習状況の評価の実施に対する不安の声も聞かれました。そのため、マスタールーブリックが、教育活動の評価のよりどころとなることを期待しました」

成して職員会議で提案し、教科ごとに検討して修正を重ねた。「全教師がマスタールーブリックの作成に参加し、議論する中で、本校が育成を目指す資質・能力についての共通認識が図れました。22年度からそれを実際に運用しながら、より本校の実態に合ったものにブラッシュアップしていき

図2 同校が育成を目指す資質・能力

知識・技能	基礎的・基本的な知識の習得だけでなくとどまらず、習得した知識を体系化し、必要な場面で適切に活用できる力
協働的課題解決力	周囲の友人を尊重し、自分の所属する集団を高めるために周囲と協働し、集団を構築していく力
思考力・判断力	物事を批判的に複数の側面から見て、課題解決に必要な手立てを考えることができる力
表現力	他者に自らの考えを、論理的に伝え、分かりやすく表現することができる力
主体性	自らが課題に向かって取り組み、自らの行動を客観的に分析しながら、最後まで諦めず取り組む力

※学校資料を基に編集部で作成。

いと考えています。」(上村先生)

マスタールーブリックを基に、各教科・科目のルーブリックを作成し、新教育課程における指導と評価に活用する方針だと、主幹教諭の徳本孝治先生は説明する。

「当初、各教科・科目のルーブリックをシラバスに掲載する案もありましたが、授業を進める中で見えてくる生徒の実態に合わせてルーブリックを作成すべきだと判断しました。現時点では多く

の教科・科目で最初の単元のルーブリックを作成済みで、22年度に入ったら、他の単元のルーブリックも作成する予定です」

ICTの活用で授業改善を推進し、深い学びの実現を目指す

同校は21年度より、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、パフォーマンス課題の導入も進めてきた。国語では、『源氏物語』の「若紫」を演劇に

するための脚本をグループで考えたり、地理では、インドの脱炭素化に向けて、石炭火力発電以外の発電所の設置計画を考えたりと、各教科・科目で試行錯誤を重ねている。質の高いパフォーマンス課題を作成するために、22年度以降も、教科・科目を超えて校内で事例を持ち寄る考えだ。ICTの活用にも積極的に取り組む同校では、20年度入学生から生徒1

人につき1台の端末を整備するとともに、校内に「教育情報部」を設置した。教育情報部のメンバーには、ICTに苦手意識を持つ教師の目線が抜け落ちないように、あえてICTの知識が少ない教師も起用した。教育情報部の藤田香織先生はこう話す。

「ICTの初心者の方が、アプリの操作や活用方法について、一つひとつ確認していく過程をマニュアル化しました。どの先生にも『ICTを活用してみたい』という気持ちがあったため、マニュアルを使ってもらえて、比較的にスムーズにICTの活用が広がっていききました」

各教科の授業においては、情報の収集やその整理・分析、意見の共有や交換といった協働学習、発表資料の作成など、様々な場面でのICTの活用が進みつつある。

「以前は、生徒の考えを一覧化する場合、プリントを集めてコピーして模造紙に貼りつけるなど、時間と労力が必要でした。そうした場面で授業支援ソフトを使うと、端末上に各生徒の考えが瞬

時に一覧表示され、スピーディーに共有することができます。新教育課程では総単位数を減らしたため、効率的に授業を進行することも求められますが、そうした点でも、ICTを活用する利点は大きいと考えています」(藤田先生)

今後は一層、各教科・科目のICT活用事例を校内で共有していく考えだ。

各教科の学びとの連携を深め探究学習をさらに発展

「総合的な探究の時間」の充実についての検討も進行中だ。探究担当の西村由先生が中心となり、地域の商工会とのつながりを深め、地元企業と連携した活動を計画している。西村先生は活動のねらいを次のように説明する。

「企業の課題を踏まえて、高校生の視点で商品やサービスを提案するプレゼンテーションやコンペを行うなど、生徒が没頭できる活動を検討しています。生徒の本気を引き出した上で、各教科の学習につながる内容にすることによつ

図3 指導共有授業シート

教科	理科	科目	化学		
指導者	西村 由	指導教室	3年 56組(教室 化学1教室)		
指導日	令和3年12月6日	指導時間	13:25 ~ 14:15		
単元名	学習のまとめ 化学と人間生活				
つけたい力	授業内で協動的に活動して思考するとともに、個々が興味関心や自己実現に向けて、主体的に学習を進めていける力				
指導・活用する資質・能力	協動的課題解決 論理的思考力				
解決すべき課題	これまで理科で学んできたことを踏まえ、日常で起こりうることを例に、協動的に活動し、論理的に思考する。				
見どころ工夫点	知識や理解度、教科・科目へのモチベーションに差が出ている集団に対して、知識構成型ジグソー法で協動的に活動させ、個に応じた学びの刺激を提供したい。				
課題に対する評価指標 (5が上位、必要に応じて2-4を定める)	5 エキスパート課題を理解し、ジグソー活動で理解を深め、論理的に答えを導くために思考し、グループで議論できた。その後、興味関心や自己実現に向けて、主体的に学習した。 3 エキスパート課題を理解し、ジグソー活動で理解を深め、論理的に答えを導くために思考し、グループで議論できた。 1 エキスパート課題を理解し、ジグソー活動に参加できた。				
指導過程	時間	学習活動	指導 指導上の留意点		
	★35	導入	5 課題の説明 自身の課題に書かなくても質問をもちかけて取り進ませる。		
		展開	エキスパート活動 ジグソー活動 課題	個人で、書向を出し、他者に伝える。グループで内容を確認させる。 各役割を他のメンバーに相談させる。 得られた知識をもとに、グループの課題の答えを議論させる。ホワイトボードに記入させる。	等脚長の短いグループへ実施する。
		まとめ	学習のまとめ 自主課題の提示	協同グループの考えを共有し、様々な意見のプロセスがあることを確認させる。個に応じた自主課題に取り組みを促す。	Classroomで提示してあり、自主課題を提出させる。
注目してほしい領域に「★」を付してください。					

※学校資料をそのまま掲載。

て、活動をさらに発展させていきたいと思っています」  
 思考力・判断力・表現力の育成における「総合的な探究の時間」と各教科・科目の連携を推進する前田智子先生は、次のように語る。  
 「各教科・科目のシラバスに沿って、『総合的な探究の時間』と教科・科目の学びがひもづけられるのが理想です。22年度は、探究学習の活動計画を踏まえて、『この単元を学ぶ際に、探究学習との関連を生徒に考えさせてほしい』といっ

た声かけを、各教科・科目担当の教師にしていこうと考えています」(前田先生)  
 互見授業を活性化し、さらなる改革の推進を図る  
 すべての教師が、新教育課程や自校が育成を目指す資質・能力について深く理解・納得をして、指導と評価の改善に向かえるようにしていくことが、今後の課題の1つだ。同校では、教師同士で授業

4月以降の課題

探究学習と教科学習を関連つけた教育活動の推進  
 互見授業の定着により、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことへの共通認識や、指導・評価手法の共有を図る

を見合う互見授業をさらに活性化すべく、教務部が中心となって体制を整え、授業者が授業のポイントを伝えるツールとして、「指導共有授業シート」を導入した(図3)。  
 同シートには、授業で指導・活用する資質・能力や解決すべき課題、見どころ、ルーブリックなどを記入し、見学者と共有する。  
 「ICTにしても、パフォーマンス課題にしても、目的や方法を口頭で伝えるだけでは不十分で、授業での生徒の表情や反応を見て、『これは意味があるな』『この方法はいいな』と感ずることで初めて実践は広がるものだと思います」(藤田先生)  
 互見授業の活性化には、教科横断的な学習の充実も期待する。  
 「最初は授業の手法の共有から

でもよいと考えています。大事なのは、教師同士で対話をする機会を増やすことであり、そうする中で、次第に各教科・科目のテーマや内容の関連づけが進んで、教科横断的な学習の実践が増えていくと思っています」(徳本先生)  
 新教育課程を見据えて、様々な面から指導や評価の改善を試みる中で、授業の様子や生徒の姿に変化が見られるようになった。藤木史朗校長は次のように述べる。  
 「私が本校に赴任した4年前とは、授業は様変わりしました。以前は、教師の解説と板書による授業が中心でしたが、今ではICTを活用して、生徒自身が主体的に考えて学ぶ姿が見られるようになりました。今後の授業改善のさらなる進展を期待しています」